

## 【論文】

# 発達障がい児を養育する保護者の支援に関する態度形成プロセス

八重樫大周 (岩手県立久慈病院)

奥野雅子 (岩手大学人文社会科学部)

## I 問題と目的

近年、発達障がいについて平成 17(2005)年に施行された発達障害者支援法の改正の動き見られる中で、発達障がいの支援について注目がますます高まっている。発達障がいの支援では本人への支援が重要であることはもちろんのこと、発達障がい児がともに生活する家庭への支援も重要となる。家庭は発達障がい児の成長・発達の基盤となる場であり、そのメンバーである家族を支援し、家庭の状態を安定させることは発達障がい児のより良い成長につながる。

発達障がい児を抱える家族は、発達障がいの特性から様々な側面で困難を抱えている。その中で、発達障がい児の保護者は育児をする中でより多くの葛藤がある。例えば、発達障がい児を抱える子どもの親が経験する育児には定型発達児の育児に比べて肯定的な働きかけを行うことの難しさが生じることが指摘されている(中島・岡田・松岡・谷・大西・辻井, 2012)。また、そういった対応の困難から生じるストレスによって母親の養育スタイルが叱責傾向となり、母親自身に育てにくさの認知が生じることも示唆されている。母親の育児ストレスとしては、育児における孤立感がストレスを高めているという指摘もある(渡部・岩永・鷺田, 2002)。これらのことから発達障がい児を抱える保護者は育児における失敗体験や不全感によって、自分の育児能力に発達障がいの原因を帰属し、母親は自身を責める場合があると考えられる。また、広汎性発達障がい児をもつ母親は、子どもが学齢期になると学校全般において心理的な負担を感じることも報告されている(松岡・玉木・初田・西池, 2013)。このように母親は子どもが幼い時期だけでなく、成長していく中で次々に新しい困難に直面することが予想される。一方、父親は仕事など家庭に関わる時間が少ないため、子どもの様子に違和感を感じた他者から子どもの障がいについて指摘をされたとしても、具体的かつ深刻な状況を直視することが難しいことが示唆されている(今西, 2013)。

このような困難を抱える保護者への支援として、保健師や就学前施設の養育者による障害への気づきの促しや障害受容の援助、支援へ繋ぐサポートなどが行われている(都筑, 2004; 中山・齋藤・牛込, 2008; 高橋, 2015)。また、アクセプタンス&コミットメント・セラピーやペアレント・トレーニングといった保護者に対する心理教育が家庭への支援として有用であることも示されている(菅野・谷, 2013; 小暮・阿部・水野, 2007)。これらの支援に関する知見は多く見られるが、発達障がい児を抱える当事者家族が子どもの発達段階や家族の状況からどのように支援を得てきたのか、その全体的な支援の変遷を明らかにする必要がある。そこで、本研究では発達障がい児とその家族の視点から、支援獲得を進めて行く上で、保護者の支援に関する態度形成プロセスに着目する。保護者が子どもの発達障がいを認識してから、支援を継続するために不可欠となる保護者のモチベーションをどのように作り維持していくのかについて検討することを目的とする。

## II 方法

### 1. 調査協力者

調査協力者は、発達障がいを抱える子どもを養育する保護者 11 名(女性 9 名、男性 2 名)であった。調査協力者の平均年齢は、40.8 歳(SD=3.01)であった。調査協力者の属性を表 1 に示す。子どもの診断名は、調査協力者が病院を受診した時期を考慮し、インタビューで語られたものをそのまま使用した。

表 1 調査協力者一覧

No.	協力者	性別	年齢	子どもの診断名
1	A	女	50	広汎性発達障害
2	B	女	49	自閉症
3	C	女	47	自閉症
4	D	女	44	広汎性発達障害
5	E	女	41	高機能自閉症
6	F	女	42	自閉症
7	G	女	43	ADHD
8	H	女	45	高機能自閉症
9	I	男	49	広汎性発達障害
10	J	女	45	高機能自閉症
11	K	男	44	高機能自閉症

### 2. 調査内容

調査協力者には、事前に研究計画書及び面接承諾書を送り、調査の概要を伝えた。調査は、個別の半構造化面接によって行った。“発達障がい児を抱える保護者の気づきとそこからの支援の変遷”についてデータを収集するため、「お子さんについて、最初に他者からどのようにふれられたか」「お子さんについて、サポートや助けにつながるきっかけになった状況について」「保護者が受けているサポートや助けは、最初からこれまでにどのように変化してきたか」「支援を受けていく中で、困難に感じたことは何か」「支援を受けていく中で、上手くいったケースと上手くいかなかったと思うケースについて」を中心に質問し、調査協力者に自由に回答してもらった。面接に要した時間は 60 分～80 分であった。

### 3. 分析方法

半構造化面接により収集したデータについて、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(Modified Grounded Theory Approach; 以下 M-GTA)(木下,2007)を用いて分析を行った。M-GTA を採用した理由は、家族と他者の相互影響を捉えながら、どのように発達障がいを抱える家族が支援を得ていくのかといった能動的なプロセスを検討するためである。分析テーマを「発達障がい児を抱える保護者の支援に対する態度形成プロセス」と設定し、分析焦点者を「すでにいくつかの支援を経験してきた発達障がい児を養育する保護者」とした。具体的な分析手続きとしては、以下の通りである。まず、データから具体例を抽出

し概念を生成した。生成した概念と新たな具体例、概念と他の概念の関係を個々の概念ごとに検討してまとめ、カテゴリを生成した。いずれの分析段階においても、生成された概念とカテゴリがデータに基づいているかを随時確認し、上記の手続きを並行しながら繰り返し行った。

### III 結果と考察

分析の結果、発達障がい児を養育する保護者の支援に対する態度形成のプロセスについて、20個の概念、6個のサブカテゴリ、5個のカテゴリが生成された。カテゴリ、概念、その概念の定義とバリエーションを表2、プロセス図を図1に示す。

以下、概念を【】、カテゴリを《》として、保護者が得る支援経験のプロセスを説明していく。

表2 M-GTA カテゴリと概念、およびその定義とバリエーションの一部

概念	定義	バリエーション(具体例)
<b>カテゴリ名《問題の察知》</b>		
【他者認識とのズレ】	保護者と他者間で子どもの成長への感じ方の差がある	私だけが変わってるっていうか違和感があったみたいで、同居してるおばあちゃんや旦那はそんなもんじゃないのみたいな感じ。(E)
【他者からの示唆】	他者から障がいの可能性について示唆が成される	ただ保育園の先生からも指摘はされたんだけど、自分の母親からも何気なくは言われてたんです。(F)
【変化の認知】	子どもの成長から新たな対応の可能性や必要性に気づいていく	診断名とかがあったほうがいいかなと思って通い始め、医師のほうから診断名。あとは支援級がいいかどうかでも相談したときに、支援学級のほうがいいと言われたので、そこで心は決まったかなって言う。(D)
<b>カテゴリ名《対応不安》</b>		
<b>サブカテゴリ名《将来への展望》</b>		
【先への不安】	子どもの成長・将来について不安を抱える	まだ将来が見えてないですね。正直言って普通に高校に通ってもらって、結婚して普通の家庭を築いてっていう普通の生活を親としてはもちろん望むんですけども (G)
【子どもへの対応】	適切な対応の仕方がわからないながらも子どもの対応を続ける	こちらに想像できないことで困っていたりするのでそれがなかなかわからなくて、物事がスムーズに行かないとかいうのはあります。(K)
<b>サブカテゴリ名《障がい理解》</b>		
【理解の混乱】	障がいを意識し始めることでの動揺や不安が現れる	悩んだりとかいろんなことをしたんですけど、そのときに苦しいとか大変とかどう受け止めていいかわからないというか。(B)
【他者理解獲得の困難】	他者の理解や協力を求めることに困難さがある	長男に関しては大きくなって口さえ開かなければ普通に見えるので、(中略)理解してもらおうっていうのも難しいかなってすごい思うし。(C)

カテゴリ名《支援の獲得》		
【子どもへの支援】	発達障がいを抱える本人が様々な支援を受ける	一対一について話はこうやって聞くんだよとかを教えてくださいながら活動させてくれたんですね。前に立って指示する先生とワキについて。(B)
【家族への支援】	家族が療育・子育てに関する様々な支援を受ける	4年生のときに児童相談所につながったことで、発達障がいに関するカウンセリングと子どもの診察、毎月勉強会に参加をしていました。(J)
【周辺サポート】	療育や子育て以外にも他者からサポートを受ける	転居するときも、市と市の間で引継ぎしてもらったので。(中略)あと住む担当の地区の方のほうに連絡してもらい、家庭訪問してくれたりとか。(D)
カテゴリ名《支援の影響》		
サブカテゴリ名《支援効果》		
【保護者の安心感】	支援を受けられることで保護者が安心感を得られる	やっぱりくつろげる場所だったからじゃないかな。私自身も。発達障がいの子もたちを持ってないとわからないことってたくさんあると思うので、それをわかってもらえるのはすごく大きかったな。(A)
【子どもの安心感】	支援を受けられることで対象児が安心感を得られる	支援教室に来ると子どもたちも自信がつくし、緊張しないって言うんですよね。(E)
【子ども理解の促進】	発達障がい、または子どもについての理解を深める	やっぱり何かわからないということから段々と、ハッとわかったわけではないんですけど、こういう人がいるんだという気づきとか理解ができたというか。(A)
サブカテゴリ名《つまずき》		
【受診への葛藤】	病院の受診に対して葛藤や抵抗がある	ショックでしたよ、やっぱり。やっぱりなって感じでも障がい名が付くっていうのは、つかなくてちょっと落ち着きのない子っていうのと付いたのでは全然違うので。病院で診断したほうが良いって言われたときにはショックでしたね。(G)
【期待との違い】	支援に求めているものが十分に得られていないという感覚を持つ	最初はなんで医者なのに人を見ないんだろうと思ってたんだけど、見てらんないんだね。人が多くて。現状そうだからお医者さんに期待するって無理なんだよね。(I)
【支援参加の抵抗】	支援の場へ参加することへの抵抗や地域のリソースを利用しづらい	いろいろ親の会にも行ったりしたんですけど、ちょっとインパクトが、やっぱり皆さんそれくらい子どものことを思ってるんだなど。私はその方たちに比べたら全然だなんて思ったりしたときもあるので、すごい硬いって言うのかな。入りにくいというか。(H)

カテゴリ名《活動スタンス》		
サブカテゴリ《行動体勢》		
【適した支援選び】	試行錯誤で子どもの成長に合う支援を受ける	デイサービスは今行きたくないみたいなことになってるので。たぶんデイサービスに行っても、年齢が上がっていくうちにつまらなくなるんだと思います。それが今一番の課題です。(H)
【支援に臨む姿勢】	自ら有用な支援の選択を行うスタンスで、支援に参加していく	うちの子にいろいろな経験をさせてあげたい。(中略) あとびったりというところがないんですよ。(I)
カテゴリ名《活動フレーム》		
【支援の捉え方】	支援の使えるところを自分たちなりに取り入れる	支援をヒントに受け入れるとか試すとかは主体がこっちだと思うので、それが間違ってるとか良いとかそういうことじゃなく、それをきっかけに自分がどうしていかってことなんだろうなとは思っている。(A)
【支援の意義】	変化していくきっかけとして支援の意義を感じる	子どもと自分が一番成長できるっていうか、安心感や学びを求めていつも動いてるんですよ。別にそこに行ったからって障がいなくなるわけじゃないし、解決はしないけど、気持ちが楽になるっていうのと前向きになれますよね。(E)

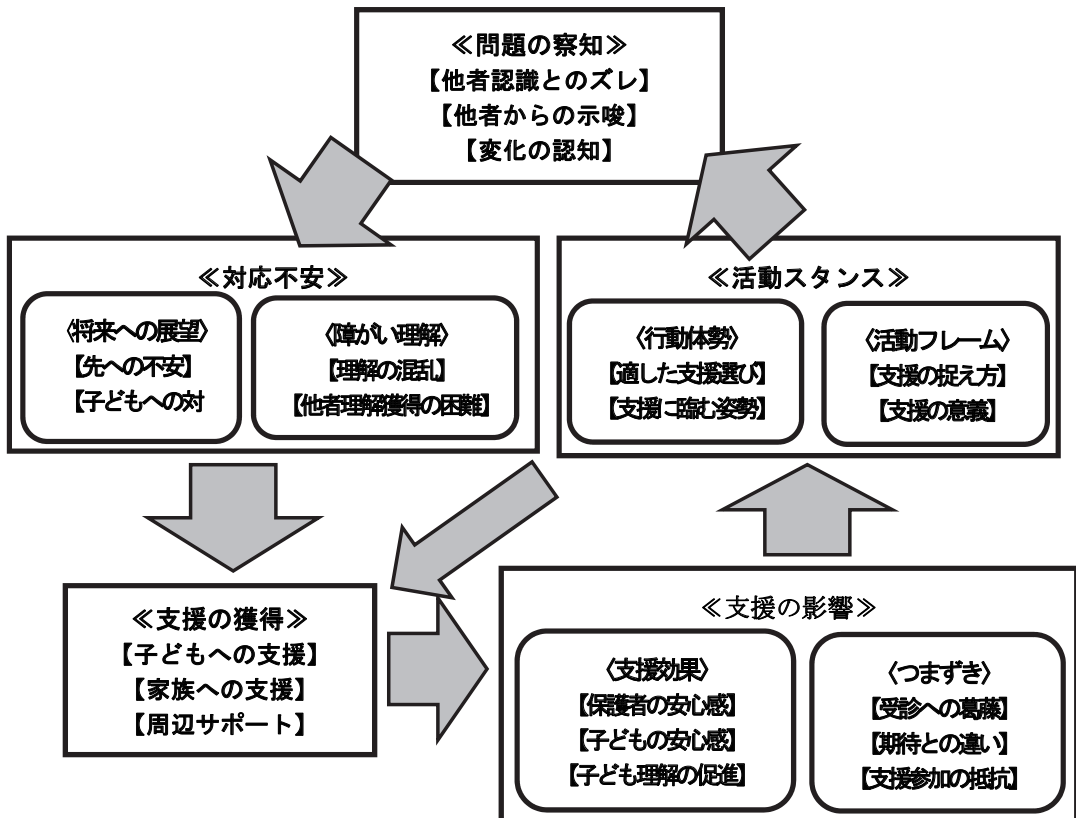


図1 保護者が得る支援態度形成プロセス

## 〈ストーリーライン〉

発達障がい児を抱える保護者の支援に対する態度形成プロセスのストーリーラインについて以下のようにまとめる。まず、子どもを養育する中で、子どもの発達のアンバランスさに気づく《問題の察知》がある。《問題の察知》では、保護者が子どもの問題を察しているが周囲がそれに気づいていない場合と周囲は子どもの問題に気づいているが保護者は気づいていない場合があり、【他者認識とのズレ】を保護者は経験する。保護者が問題を気づいていない場合は【他者からの示唆】によって子どもの発達のアンバランスさや発達障がいを明確に意識し始め、保護者は自身の態度の【変化を認知】することになる。

問題が意識されることで、保護者は子どもに対する《対応不安》を覚える。この不安は、〈将来への展望〉に関するものと〈障がい理解〉に関するものがある。保護者は子どもの将来に対して成長した姿が想像できない、家族はどうなってしまうのかといった【先への不安】を抱える。また、これから子どもにどのように接したらよいのかといった【子どもへの対応】に悩みを持つ。将来に対する不安と同時に、障がい意識されることで子どもの発達状況がわからなくなる【理解の混乱】が起こり、周囲の他者への説明も困難なため、子どもについて【他者理解を獲得する困難】を感じる。不安が生じることで、保護者はそれに対処しようと《支援獲得》を目指していく。その中には支援教室での活動や学校における教育指導などの【子どもへの支援】、保護者カウンセリングや発達障がいに関する勉強会、親の会といった【家族への支援】がある。それに加え、【周辺サポート】として行政によるサポートや支援者から保護者以外の家族メンバーにも働きかけてもらうといったサポートがなされる場合がある。

支援を得ていくにつれて《支援の影響》が現れてくる。〈支援効果〉として、他の保護者とつながることや支援者からアドバイスをもらえることで【保護者の安心感】が得られる。また、子どもが社会的スキルを身につけることや成功経験を積むことによる【子どもの安心感】が得られ、子どもへの支援が進むに連れて、保護者は【子ども理解の促進】を経験する。一方で、影響には支援に対する保護者の〈つまずき〉も存在する。このつまずきには、医療機関へ行くことに悩む【受診への葛藤】や支援の場自体に入りづらさを感じるといった【支援参加の抵抗】が存在する。また、医療機関への受診や支援の場への参加を行ったとしても、求めている内容と異なることや内容に物足りなさを感じる【期待との違い】が生じる場合がある。支援に関する効果とつまずきは、支援を経験する中で片方だけ存在するわけではなく、どちらも支援の影響として保護者の支援に対する《活動スタンス》を形作っていく。

保護者が経験した支援の影響を通して形成された《活動スタンス》には、得た支援を自分たちなりに工夫して使っていこうとする【支援の捉え方】と家族や他者が変わるきっかけとして支援を捉える【支援の意義】を含んだ〈活動フレーム〉が存在する。保護者はこのフレームに則して、支援に臨む〈行動体勢〉を整えてゆく。それには、主体性を持ち支援をコントロールしていくといった【支援に臨む姿勢】によって家族に【適した支援選び】を行うことが可能になる。このように、支援が進むことで活動のスタンスが形成されていく。

さらに、子どもの発達が促される中で保護者が【変化を認知】することにより、新たな《問題の察知》がある。新しい察知を通して新たな不安が生じ、新たな支援の獲得といっ

た過程が繰り返され、不安に対処してゆくことになる。

#### IV 総合考察

##### 1. 問題の察知から支援に関する態度形成へ

発達障がい児の保護者の支援に関する態度形成プロセスについて分析と検討を行った結果、本研究では保護者が問題の察知から支援を獲得し、支援へのスタンスを形成していく過程を示した。このプロセスから明らかになったことは、子どもの育ちに関する問題を認識することから子どもへの対応や将来について不安を抱え、その不安を抱えながら支援を獲得し、各支援の成功体験や失敗体験を積み重ねることで支援への態度を形成していくという流れである。

発達障がい児は外見上の特徴で判断しにくいことや乳幼児期での診断が難しいなどの特性から、保護者にとっても気づきにくいものであると考えられる。しかし、本研究のプロセスから保護者は、子どもが発達障がいを抱えているという意識を持たないまでも、子どもの育ちについて何らかの問題意識を持つことが示唆された。この段階では、子どもの育ちに関する不安・疑いとそれらについての否認が行われ、次第に発達への疑いが強まり、保護者は悩み始めるといえる(渡邊, 2004)。また、保護者はこの微妙な問題意識を他の家族メンバーや周囲の他者と共有しようとするが、うまく共有されず、子どもの見方について周囲とのズレを感じるようになる。問題の認識自体と周囲との認識のズレから、保護者は現在の我が子がどのような状態にあるのかわからない、将来の展望が見えないといった不安を生起させることが考えられる。一方で、保護者に問題意識がない場合でも、周囲の他者から子どもの育ちに関して問題の指摘が行われることがある。この指摘によって保護者は問題を認識し始めるが、同時に不安感を持つことになる。山根(2011)によると、発達障がいの診断告知について子どもの発達への不安を感じる時期が遅く、診断告知を受ける時期が早いほど、母親は診断告知時に不安感やショックを体験していることが指摘されている。本研究のプロセスでは、発達に関する他者からの問題の指摘は、診断告知と比べて明確なものではないとしても、保護者にとってはショックな体験であり、不安感を抱え始めることが推察される。

保護者は子どもの発達に関する不安を抱えることで動機づけられ、支援を求め獲得していくことになるが、獲得した支援によって成功体験である〈支援効果〉とうまくいかなかった体験である〈つまずき〉という、双方向の《支援の影響》を受ける。成功体験は、支援に対する安心感として保護者に捉えられる。一方で、つまずき体験は、支援参加への葛藤や得た支援の期待との差などの支援に対する失望として捉えられる。この〈支援効果〉として得られた安心感が、支援を継続する強化子として重要な役割を果たしていると考えられるが、一方で、〈つまずき〉として得られた葛藤や抵抗が、支援を停滞させる要因として保護者に影響を与えることが考えられる。

《支援の影響》は得られた支援の継続・停滞に関わるのみならず、その後の支援への姿勢にも影響を与える。支援の効果があつたと捉えることは、発達障がい児を抱える家族が支援を主体的に獲得していく動きや支援の有用な部分に焦点を当て利用するといった視点を持つ助けになるといえる。しかし、支援を経験する中で感じた〈つまずき〉も、子どもや保護者が本当に求めている支援を明確にしていく効果もあると考えられる。

《支援スタンス》では、〈支援効果〉と〈つまずき〉といった双方向の《支援の影響》を受け、保護者の中に“子どもが成長していく中でどのような支援を選択するか”、“自分たちの家族にあった支援はどのようなものか”などの支援への姿勢を形成していくことが推察される。そして、支援のスタンスが形成されていく中で子どもの成長に伴い、新しい支援が必要ではないか、現在の支援が合わなくなってきたのではないかとといった【変化の認知】が生じ、新たな支援への態度形成プロセスが動き出すと考えられる。

## 2. 支援の獲得から支援の影響、スタンス形成から支援の獲得へ

保護者が形成する支援態度のプロセスについて全体的に考察したが、《支援の獲得》から《支援の影響》への流れ、また《活動スタンス》がどのように《支援の獲得》に作用するのかについて考察を加える。まず、発達障がい児を抱える家族が獲得・参加する支援には、【子どもへの支援】と【家族への支援】、【周辺サポート】の3種類の支援が存在することが示唆された。保護者はそれらのこれらの支援についての影響を評価することになる。その際、保護者が支援に関してネガティブな評価をするときがある。たとえば、支援へ参加することに抵抗を感じるといったことである。この抵抗感は新しい場に参加しづらいという保護者の気持ちもあるが、加えて支援の場に参加することで保護者は子どもの問題に改めて直面することとなるからであると考えられる。保護者が子どもの問題に直面することの困難さは、障害受容の観点から様々な研究がなされており(桑田・神尾, 2004; 夏堀, 2001; 中田, 1995)、支援に参加することへの抵抗感も障がいを受容していく過程の一部として示され、〈つまずき〉となっているのではないかと推察される。これは、【受診への葛藤】でも同様のことがいえる。保護者が支援に関する抵抗感を乗り越え、支援を経験していくことで子どもへのサポートが獲得できることになる。本研究の結果から、“支援を得ていく中で発達障がい児は他者との関わりを通し安心感を得ることや社会的スキルを学んでいる”、といった理解が保護者によってなされていた。また、保護者は支援の場に参加できたことで、子どもの家庭での様子と異なる姿が見られたこと、他者とつながれたことなど様々なことを肯定的に認知すると考えられる。支援を肯定的に捉えることで、保護者は支援で得られた知識を用いて現在の子どもの状態を見つめ直す余裕を持ち、【子ども理解の促進】がなされると推察される。一方で、支援を得たとしても保護者が求めていたものと異なる支援を経験することがある。それは支援に関する事前情報が少なく、支援に参加してみなければわからないといった場合や保護者が求めていた支援であったが子どもに合わなかったといった場合などが考えられる。

保護者は、支援の効果とつまずきという両価的な影響を受けながら支援に関する《活動スタンス》を形成してゆく。このスタンスの形成に並行して発達障がい児とその家族は成長してゆき、新たな問題の発見がなされるが、《活動スタンス》はその問題に対する支援の選択にも作用すると考えられる。支援の選択と獲得には、不安に対処するという保護者の行動欲求があると考えられる。支援に関する態度形成が進むと、保護者は不安への対処という支援を選ぶ基準に加えて、どのような内容を求めるのか、どのように捉えるのかといった、さらなる基準を持つことができる。つまり、支援が進むことによって保護者の支援への考え方が進化し、よりシャープな視点で支援を選択し、実施していくことが可能になると推察される。



### 3. 支援に関する態度形成における不安の役割

これまでに述べたように《支援の影響》が保護者の支援に関する態度を形成し、子どもと家族の成長とともに新たな態度形成プロセスが進行することが示唆されたといえる。このプロセスでは、子どもの成長に対する保護者の不安が常に関係することが予想されるが、こういった不安が支援に関する態度形成においてどのような役割を担っているのかについて考察したい。

保護者が子どもの問題を認識することは、発達障がい支援の重要な起点となりえる。しかし、発達障がい児の保護者は問題を認識することで、不安や心配といった感情反応が生じ、時に保護者は拒否的・防衛的の反応を示す場合があることが報告されている(秋山ら, 2007; 山岡ら, 2008; 渡辺ら, 2014)。親が子どもの問題を知れば心配や不安を抱き、それを否定したいという感情は自然な反応であると考えられるが、それに加えて子どもの問題を何とか解決したいと思うことも親の自然な反応であるといえる。本研究で得られた保護者の語りでは、“検診の結果が出てから血眼になって子どもがどういう状態なのかを調べた”“病院受診の中で私がこういう子どもたちを育てていくにはどうしたらいいのだろう”などがあり、保護者は少なからず生じた不安に対応しようとする想いを持つことが推察される。子どもの問題への不安は、マズロー (Maslow, 1954)の基本的欲求にある安全欲求にもあるように、それに対処し安全・安心を求める動機となると考えられる。

不安は支援への抵抗を招く可能性のある感情であるが、うまく活用することができれば発達障がい児を抱える家族の重要な支援へのモチベーションとなりうるということが考えられる。本研究で示唆したプロセスでは、子どもが抱える問題に対する不安になんとか対処しようとするのが、保護者の支援への動機づけとなり、支援を獲得していくことが明らかとなった。そして、支援への態度が形成されることと並行し、新たな問題の発見、不安の表出がなされ、発達障がい児を抱える家族は不安に対処しながら成長を続けていくことが推察される。つまり、保護者が不安感情を抱えることは、家族の新しい動きへのステップアップにつながるということが考えられる。

### 4. 臨床への示唆

発達障がい児に対する支援を開始し、支援を継続していくことを考えた場合、保護者の支援に関する態度形成プロセスに注目することは有用だといえる。保護者は問題を察知すると少なからず不安を生起するため、その不安が大きすぎる場合は支援参加への抵抗となるが、適度な不安であれば、保護者は不安を解消することをモチベーションとして、支援獲得に動くことができると考える。したがって、発達障がいの問題から生じるすべての不安が必ずしも支援抵抗となるわけではなく、保護者がコントロールできると感じる大きさならば、むしろ支援促進の効果を持つと考えられる。そのため、支援者には保護者の不安とそれに対する対処能力のアセスメントが求められる。

加えて、発達障がい児とその家族が経験している支援に関して保護者が一時的にネガティブに感じていたとしても、支援の効果とつまずきは双方を感じることが考えられるため、支援に関するポジティブな態度が形成される可能性がある。しかし、支援に対してつまずいているといった感覚が、支援を効果的に捉えることより大きくなってくると、保護者は

支援へのネガティブなスタンスを形成し、支援の中断が成されるリスクがある。その場合は、支援の断絶を防ぐためにも、支援者は保護者のつまづき経験を取り上げ、次の支援選択に活かす方向付けを行うことが必要であると考えられる。

#### 〈引用文献〉

- A. H. Maslow (1954). *Motivation and personality*. Harer&Row, (小口忠彦 訳(1987) [新改訂版] 人間性の心理学—モチベーションとパーソナリティ— 産業能率大学出版部).
- 秋山千枝子・堀口寿広(2007). 発達障害児の保護者による「気づき」の検討. 脳と発達, 39, 268-273.
- 今西良輔(2013). 発達障害児を育てる父親の生活体験—3人の父親と息子達の歩み—. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 9(1), 27-34.
- 菅野晃子・谷晋二(2013). 発達障がい児をもつ保護者への心理的支援—ACTワークショップによる効果から—. 立命館人間科学研究, 26, 9-20.
- 木下康仁(2007). 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)の分析技法. 富山大学看護学会誌, 6(2), 1-10.
- 小暮陽介・阿部美穂子・水内豊和(2007). グループペアレント・トレーニングプログラムの効果についての検討—教育センターにおける実践から—. 富山大学人間発達科学部紀要, 2(1), 137-144.
- 桑田左絵・神尾陽子(2004). 発達障害児をもつ親の障害受容過程についての文献的研究. 児童青年精神医学とその近接領域, 45(4), 325-343.
- 松岡純子・玉木敦子・初田真人・西池絵衣子(2013). 広汎性発達障害児をもつ母親が体験している困難と心理的支援. 日本看護科学会誌, 33(2), 12-20.
- 中山かおり・齋藤泰子・牛込三和子(2008). 就学前の発達障害児とその家族に対する保健師の支援技術構造の明確化—支援の開始から保護者の障害受容までの支援に焦点を当てて—. 日本地域看護学会誌, 11(1), 59-67.
- 中島俊思・岡田涼・松岡弥玲・谷伊織・大西将史・辻井正次(2012). 発達障害児の保護者における育児スタイルの特徴. 発達心理学研究, 23(3), 264-275.
- 中田洋二郎・上林靖子・藤井和子・佐藤敦子・井上僊久和・石川順子(1995). 親の障害認識の過程：専門機関と発達障害児の親の関わりについて. 小児と精神と神経, 35(4), 329-342.
- 夏堀撰(2001). 就学前期における自閉症児の母親の障害受容過程. 特殊教育学研究, 39(3), 11-22.
- 高橋実(2015). 発達障害児に対する「気になる段階」からの子ども家庭支援. 福山市立大学教育学部研究紀要, 3, 67-76.
- 都筑千景(2004). 援助の必要性を見極める—乳幼児健診で熟練保健師が用いた看護技術—. 日本看護科学会誌, 24(2), 3-12.
- 渡邊恵子(2004). 通常の学級で問題になっている子どもたち(2)—わが子の「軽度発達障害」を受容するまでの親へのサポート—. 人間研究, 40, 37-49.
- 渡辺頭一郎・田中尚樹(2014). 発達障害児に対する「気になる段階」からの支援—就学前施

- 設における対応困難な実態と対応策の検討一. 日本福祉大学子ども発達学論集, 6, 31-39.
- 渡部奈緒・岩永竜一郎・鷲田孝保(2002). 発達障害幼児の母親の育児ストレスおよび疲労感. 小児保健研究, 61(4), 553-560.
- 山根隆宏(2011). 高機能広汎性発達障害児をもつ母親の診断告知時の感情体験と関連要因. 特殊教育学研究, 48(5), 351-360.
- 山岡祥子・中村真理(2008). 高機能広汎性発達障害児・者をもつ親の気づきと障害認識. 特殊教育学研究, 46(2), 93-101.